

清原宣賢書写本に見る漢音形の衰退について

坂 水 貴 司

一、本稿の目的

經書等の漢籍は漢音読されたことが知られている^①。この認識は室町時代の学者でも同様であった^②。しかし室町時代における漢音の実態については、清濁に関する研究が見られるものの^③、その他はいまだ不明な点が多い。

本稿の筆者は、室町時代に生きた清原宣賢（一四七五—一五五〇）一個人の書写本を対象として、漢字音の記述を行ってきた。その宣賢書写本には漢音資料であっても、例外的な呉音混入とは思えないほど多く呉音形が使用される字がある。その字では漢音形より呉音形が優勢になっており、「一音固定化」により漢音が優勢になる日本漢字音の流れに逆行しているように見える。しかし、漢音・呉音の両音をもつ字が一音固定化するという点では共通しており、その様相を捉えるためには漢音形が衰退する字についても検

討が必要である。そこで、漢音資料を多く遺す清原宣賢書写本を活用すれば、漢音形が衰退し、呉音形のみが残っていく様相を捉えることが可能となる。宣賢書写本の整理によって、一音固定化の過程の一端を明らかにしたい。

本稿は、宣賢書写本において漢音形衰退の過程にある字の漢音形・呉音形の分布を調べることと、その分布の形成理由を明らかにすることを目的とする。

二、研究の方法

本稿で対象とするのは、「所」「初」「廢」の三字である。この三字は宣賢書写本において、漢音形が期待される箇所、漢音形・呉音形の両形が使用されている。さらに、平安鎌倉時代の漢音資料によって漢音形が確定でき、宣賢書写本および他の文献で検討に堪える用例数を得られるのは、この三字のみである。

まず、平安鎌倉時代の資料における当該字の音形を概観する。その後、宣賢書写本での当該字の漢音形と呉音形の分布を調査する。平安鎌倉時代の資料を参照する目的は、漢音形を確定することと、宣賢以前の様相を調査することの二点である。

宣賢書写本には漢音読を中心とする漢音資料の他、漢音・呉音・唐音等の字音が混ざる資料（抄物など。以下「混読資料」と称する）が存する。本稿では漢音形が出現しやすいと予想される漢音資料と、相対的に出現しにくいと予想される混読資料の二群に分けて考察を行う。抄物に漢文本文を載せる資料の場合、漢文本文部分を漢音資料に、注釈の部分を混読資料に含めた。宣賢書写本に合わせ、平安鎌倉時代の資料も漢音資料と混読資料の両方を参照する。ただし和文資料は呉音中心であり、宣賢の混読資料と性格を異にする。そのため、調査した資料は往来物を含む日本漢文資料や辞書である。

挙例は語を単位とする。漢籍の割注部分で単字の字義を説明したものは「割注」と注記し、左傍にある訓点には「左」と注記した。用例中の仮名書き漢語には（ ）内に振り漢字を示した。また卷子本は行数で、冊子本は丁・表裏・行数で所在を表示する。ただし、複製本での所在表示が適切な場合は複製本での頁数等を表示した。

本稿では仮名音注が漢音形・呉音形のどちらを示すか、ということが分ればよいので、「音形」と表現した場合にも、具体的な音

価は捨象して仮名表記で論を進める。本稿で扱う「所」「初」字は平安鎌倉時代と室町時代との間で音価の異なりが想定され、音韻表記・音声表記のどちらを採用しても煩雑になると考えたため、このような措置をとった。

三、平安鎌倉時代における「所」「初」「廢」字の音形

平安鎌倉時代の資料で「所」「初」「廢」字の音注加點例が見られたのは、次の資料である。資料の種類ごとに分類し、可能な限り加點年に従って並べる。依拠テキストは【 】内に示す。

（一）漢音資料

- ① 漢籍訓読資料…東北大学『史記』卷第十孝文本紀延久五年点
【一〇七三】年点【『史記』孝文本紀』一九五四年、貴重
- ② 古典籍刊行會／宮内庁書陵部『群書治要』（550・2）経部鎌倉中期点【『古典研究會叢書漢籍部九 群書治要』一九八九年、汲古書院】／杏雨書屋『古文孝経』仁治二（一二四一）年奥書本【杏雨書屋藏の写真・『古文孝経』一九三九年、貴重圖書影本刊行會】
- ③ 漢籍字音直読資料…東京国立博物館『蒙求』長承三（一一三四）年点（声点は平安中期）【築島裕『長承本蒙求』一九九〇年、汲古書院。所在は『蒙求』四字一句の通し番号】

④ 仏書訓読資料…興福寺『大慈恩寺三藏法師伝』【築島裕『興

福寿本大慈恩寺三藏法師傳古點の國語學的研究 譯文篇

一九六五年、東京大学出版會 / 東本願寺『教行信証』(二)辨

正論 引用部分) 『親鸞聖人真蹟集成 第二卷』一九七四

年、法藏館 / 京都大学人文科学研究所『大慈恩寺三藏法

師伝』貞応二(一一二二)年点【京都大学人文科学研究所

公開の電子画像】

〔d〕仏書字音直読資料・東京大学国語研究室・仏母大孔雀明王経

鎌倉中期点【『東京大学国語研究室資料叢書第十五卷 古

訓点資料集(1)』一九八六年、汲古書院。所在は、同複

製本の頁数と行数】 / 高山寺『大乗金剛不空真実三摩耶经

般若波羅蜜多理趣品』鎌倉中期点(重文第一部一九七号。

祖点は鎌倉初期。以下『理趣経』とする)【沼本克明「高

山寺藏理趣経鎌倉期点解説並びに影印」(『鎌倉時代語研

究』第六輯 一九八三年五月、鎌倉時代語研究会)】

〔e〕研究書・宮内庁書陵部『文鏡秘府論』保延四(一一三八)年

点【『東方文化叢書第一 文鏡秘府論』一九三〇年、東方

文化学院。所在は表紙を含めた頁数・行数】

〔f〕書簡等・東本願寺『教行信証』(後序部分)

(2) 混読資料

〔a〕国語辞書類・石川武美記念図書館成實堂文庫『節用文字』

【『節用文字』一九三二年、古典保存會】 / 尊経閣文庫『色

葉字類抄』三卷本【『尊経閣善本影印集成18 色葉字類抄
一 三卷本』一九九九年、八木書店】

1. 平安鎌倉時代における「所」字の音形

(1) 漢音資料

平安鎌倉時代の漢音資料では「ソ」形が中心であり、「シヨ」形が例外的に出現する。これより、「ソ」形が漢音形であることが確認できる。

〔ソ〕漢籍訓読資料・所職^ソ所^ソ生^ソ 211(以上『古文字経』)

〔C〕仏書訓読資料・所^ソ在^ソ ⑨345(興福寺本『大慈恩寺三藏法師

伝』C種点||承徳三(一〇九九)年点) 佳^ソ所^ソ ⑨370、所^ソ天^ソ

⑦285(以上興福寺本『大慈恩寺三藏法師伝』D種点||承徳三年頃点) 所説^ソ

(六末79・5) (『教行信証』)

〔d〕仏書字音直読資料・所謂^ソ169・1、名^ソ字^ソ所^ソ謂^ソ

(去)71・4、所^ソ有^ソ一切6・2、所^ソ有^ソ罪^ソ業^ソ

(入)懸並^ソ消^ソ除^ソ65・5、所^ソ有^ソ衆^ソ生^ソ93・7、

所^ソ有^ソ厄^ソ難^ソ11・3、所^ソ有^ソ厄^ソ難^ソ88・2、

共^ソ所^ソ宣^ソ説^ソ53・6、之^ソ所^ソ宣^ソ説^ソ

懸^ソ入^ソ懸^ソ193・5、随^ソ所^ソ住^ソ處^ソ常^ソ安^ソ樂^ソ

66・1、大^ソ師^ソ所^ソ生^ソ處^ソ74・5、之所^ソ侵^ソ

害^ソ200・5、為^ソ毒^ソ所^ソ中^ソ12・5(以上『仏母大孔雀明

王経(平) 常(平) 所(平) 遊(平) 處(平) 11(平) (理趣経)

シヨ 漢籍訓読資料・處(平) 所(平) 179(史記延久志) 所(平) 宜(平) 216b(古

文孝経)

仏書字音直読資料・佛(入) 宣(平) 説(入) 55・5、
俱(平) 詣(去) 佛所(平) 204・1(以上『仏母大孔雀明王経』)

「シヨ」形が出現する資料のうち漢籍訓読資料の『古文孝経』と
仏書字音直読資料の『仏母大孔雀明王経』では、「所宣」という例
が共通している。呉音で読まれることの多かった漢語であると考え
られる(後に挙げる三巻本『色葉字類抄』でも呉音読されている)。

(2) 混読資料

平安鎌倉時代の混読資料には、「ソ」形とその連声濁形の「ゾ」形、
「シヨ」形とその連声濁形の「ジヨ」形が確認できる。

ソ(ゾ) 国語辞書類・巷所(平) 11ウ6、所澁(平) 38オ2(以上『節用
文字』巷(平) 所(平) 91ウ3(『色葉字類抄』)

シヨ(シヨ) 国語辞書類・綱所(平) 26オ1(節用文字) 綱所(平) 84ウ4、

112オ7、所縁(平) 84ウ1、所得(平) 84ウ4、所知(平) 84ウ4、
无所詮(平) 85ウ2、所司(平) 87オ3、所(平) 據(上) シヨキヨ 83オ6、「キ

ヨ」の右傍に「コ」所(平) 負(平) シヨウフ 83ウ7、所(平) 澁(入) 84ウ
シヨフ 84ウ2、所(平) 課(平) シヨクワ 84ウ4、所(平) 依(上) シヨエ 84ウ

5、所(平) 枯(平) 84ウ6、所(平) 宣(平) シヨセン 84ウ6、閑
所(平) カンシヨ 100オ5(以上『色葉字類抄』)

混読資料の「ソ」(「ゾ」)形には、『節用文字』『色葉字類抄』の「巷
所」、『節用文字』の「所澁」がある。「巷所」について、『色葉字類抄』
には「所」字の呉音声調を示す平声濁点がある。前接字「巷」も呉
音声調を示す平声点が見られるので、「巷所」の「ソ」形は呉音形
の直音化例と解釈できる。『節用文字』の「巷所」の例も同様に考
えられる。また『節用文字』の「所澁」について、連接字等の外部
的な根拠では漢音と確定できない。

このように、混読資料では漢音形「ソ」の確例が確認できない。
一方混読資料において、「所」の呉音形「シヨ」が、漢音形「ソ」
に比べて用例が多く、優勢であったことは確実であろう。

2. 平安鎌倉時代における「初」字の音形

(1) 漢音資料

平安鎌倉時代の漢音資料では幅広い文体で「ソ」形のみが出現す
る。そのため、「初」字の漢音形は「ソ」であると言える。

ソ 漢籍字音直読資料・太(平) 初(平) 日(入) 月(入) 97初(平)
平(平) 起(上) 石(上) 34、李(上) 陵(平) 初(上) 詩(平) 19(以上『蒙求』)

〔C〕仏書訓読資料・初(平) 兎(平) 307(大慈恩寺三藏法師伝) 貞応二年忠

〔D〕仏書字音直読資料・初(平) 生時(平) 110・3、初(上) 生時(平) 106・4、初(上)

生(平) 時(平) 108・4(以上『仏母大孔雀明王経』)

〔E〕研究書・初月(平) 18・5(文鏡秘府論)

〔書簡等…初夏（六末93・8）（教行信証）〕

(2) 混読資料

一方混読資料では、「ソ」形と「シヨ」形の両方が出現する。

〔ソ〕a 国語辞書…最^去初^上サイツ^平⑤1ウ2（色葉字類抄）

〔シヨ〕a 国語辞書…初^平④28オ4、初^去夜^平シヨヤ^平⑦7ウ7（以上『色葉字類抄』）

混読資料で「ソ」形で現れる『色葉字類抄』の「初^上ソ」は、音形・声調の両面で漢音と一致するものの、懐疑的な目で見れば次のような問題がある。まず前接字「最」は漢音声調・呉音声調ともに去声であり、前接字で判断できない。また「初」字に加点された上声点は漢音資料と一致する一方で、呉音声調の去声が、去声字に後接したために上声化したとも解釈できる。よって当該例の「ソ」が漢音形の可能性はあるものの、確例でない。

〔シヨ〕形で現れる『色葉字類抄』の「初^平シヨ」には、呉音形を示す仮名音注と、漢音声調を示す声点がある。混読資料である『色葉字類抄』では、漢音形「シヨ」が衰退しつつあったことをうかがわせる。「初夜」の例は、音形・声調ともに呉音である。

以上より、平安鎌倉時代の混読資料では呉音形「シヨ」が優勢であったと考えられる。漢音形「ソ」が使用された可能性はあるものの、本稿の調査では確例が指摘できなかった。

3. 平安鎌倉時代における「廢」字の音形

(1) 漢音資料

平安鎌倉時代の漢音資料では「廢」字の字音として「ヘイ」「ハイ」の両形が見られる（「廢」字も用例に含めた）。

〔ヘイ〕a 漢籍訓読資料…荒廢^平③20（群書治要）
〔ハイ〕a 漢籍訓読資料…廢^平③64（群書治要）

〔C〕仏書訓読資料…廢^{スル}（六末70・1）（教行信証）

漢音資料には「ヘイ」形も存する。中国語中古音で同じ韻を有した「穢」字は漢音資料で「エイ」と出現する（穢^平⑩474『群書治要』）。これと韻が一致する「ヘイ」が元々の漢音形であると考えられる。

(2) 混読資料

混読資料では、「ハイ」形のみ例が存する。

〔ハイ〕a 国語辞書…廢^平置^上ハイ④33ウ2（色葉字類抄）
『色葉字類抄』の「廢置」の例には呉音声調を示す平声点があり、呉音読されている。

四、宣賢書写本における「所」「初」「廢」字の音形

以下の資料に例を見出すことができた。京都大学附属図書館清家文庫蔵本で依拠テキストを示していないものは、同館公開の電子画像に依った。多く挙げる所蔵機関は、次の略称で示す。

京大清家 〓 京都大学附属図書館清家文庫、天理 〓 天理大学附属

天理図書館、天理吉田＝天理大学附属天理図書館吉田文庫

宣賢書写本では、講義年を示す資料が多いものの、書写年を明確に示す文献は多くない。そのため、資料の種類ごとに分けて並べるものの、書写年を示すことは省略する。

(1) 漢音資料

- [a] 漢籍訓読資料…京大清家『孟子』(1・66モ2貴)／京大清家『春秋経伝集解』訓点(1・65シ7貴)／静嘉堂文庫『毛詩鄭箋』(8478・20・303-1)『古典研究會叢書漢籍之部』一
三 毛詩鄭箋』一九九二年—一九九四年 汲古書院／宮内庁書陵部『礼記』(556・18)【宮内庁書陵部提供画像】／天理『古文孝経』(122・9・イ11)【天理図書館提供紙焼写真】／大東急記念文庫『孝経秘抄』(22・35・44)訓点【原本調査】／天理『周易抄』(122・1・イ13) 訓点【天理図書館提供紙焼写真】／京大清家『中庸章句』(1・66チ4貴)／京大清家『蒙求』(5・67ヒ2貴) 注釈
- [b] 国書訓読資料…天理『日本書紀抄』後抄本(210・1・イ151) 訓点【天理図書館善本叢書和書之部第二十七卷 日本書紀纂疏 日本書紀抄』一九七七年、天理大学出版部】
- (2) 混読資料
- [a] 漢籍抄物…京大清家『左伝聴塵』(1・65サ1貴、○で囲んだ数字は残存冊のみの通し番号)／京大清家『春秋左伝抄』

- (1・65シ5貴、○で囲んだ数字は残存冊のみの通し番号)／京大清家『春秋経伝集解』抄物(1・65シ7貴)／大東急記念文庫『大学聴塵』抄物(22・35・43)【清原宣賢漢籍抄翻印叢刊1 大学聴塵影印之部』二〇一一年、汲古書院】／大東急記念文庫『孝経秘抄』(22・35・44) 抄物

- [c] 国書字音直読資料…天理吉田『祝戸并反問作法等』(吉43・80)「反問作法」部分【天理図書館所蔵画像。所在は「反問作法」での行数】／天理吉田『招魂祭文相伝切紙』(吉43・98)「身固法」部分【天理図書館所蔵画像。所在は「身固法」の「次執刀呪曰」からの行数】／天理吉田『宗源行事次第』(吉42・397)字音直読部分【天理図書館所蔵画像】
- [d] 国書抄物…天理『日本書紀抄』後抄本(210・1・イ151) 抄物
- [e] 辞書…京大清家『宣賢卿字書』(4・85セ1貴)【分類體辭書 宣賢卿字書』一九七二年、臨川書店】／京大清家『塵芥』(4・85シ1貴)【清原宣賢自筆伊路波分類體辭書 塵芥』一九七二年、臨川書店】

1. 宣賢書写本における「所」字の音形

(1) 漢音資料

宣賢の漢音資料における用例は、全て漢音形の「ソ」形である。

ソ a)漢籍訓読資料…會所^ソ⑥6ウ3 (『春秋経伝集解』訓点 公所^ソ④203

(『毛詩鄭箋』) 所長^ソ⑦16オ2b (『礼記』) 所生^ソ15オ2 (『古文学経』)

所生^ソ「所・シヨト不讀」43ウ3 (『孝経秘抄』訓点)

漢音資料の用例は全て経書の用例である。ここで挙げた経書はいずれも、本奥書を写していたり、古い時代の表記を残していたりしており、移点の影響の強い資料である。

また大東急記念文庫蔵『孝経秘抄』の「所生」の例には、「所・シヨト不讀」という注があり、表記として「ソ」が出現するのみではなく、「so」と発音すべきことが示されている。

(2) 混読資料

宜賢の混読資料では、「ソ」「シヨ」の二形が確認される。

ソ d)国書抄物…呉音に連接 成所作智^ソ⑤4オ10a (『日本書紀抄』抄物)

シヨ ②漢籍抄物…呉音に連接 所行^{シヨ}③27オ12 (『左伝聴塵』)

〈連接字での判断不可〉キウシヨ^{シヨ}①15オ23 (『春秋経伝集解』抄物)

所談^{シヨ}9オ6b、見所^{シヨ}45ウ2a (以上『大学聴塵』抄物)

b)国書訓読資料…呉音例 所^{シヨ}①1オ4 (『年中行事』)〈漢音に連接〉山作所^ソ8ウ11 (『年中行事』)

c)国書字音直読資料…〈連接字での判断不可〉所使^{シヨ}15 (『祝戸并反問作法等』「反問作法」部分) 所使執持金刀^{シヨ}2 (『招魂祭文相伝切紙』「身固法」部分)

②字書・辞書…〈単字〉所^ソ②28オ5 (『塵芥』) 〈漢音に

連接 御會所^{コクワイシヨ} 15ウ1 (『宣賢卿字書』) 閑所^{カンシヨ}⑤2ウ5、謫所^{タクシヨ}⑥6ウ4、會所^{クワイシヨ}①10ウ8、關所^{カンシヨ}①13オ4、居所^{キョシヨ}①50オ5・①50ウ2

「ミセケチ」、近所^{キンシヨ}①50ウ1、灸所^{キウシヨ}①54オ3、名所^{メイシヨ}①60ウ5、遠所^{エンシヨ}①81オ7、所職^{シヨシヨク}①75ウ2、所由^{シヨユ}①75ウ3、所據^{シヨコ}①75ウ5 (以上『塵芥』)

〈呉音に連接〉伴道所^{ハンダウシヨ}①10ウ1・①11オ1、納所^{ナクシヨ}①90ウ8、公文^{クモン}①104ウ6、公所^{クシヨ}①108オ8、會所^{クワイシヨ}①81オ1、穢所^{セツシヨ}①81オ7、殺所^{セツシヨ}①99オ5、所領^{シヨリヤウ}①68オ2、所從^{シヨジュウ}①69ウ6、所屬^{シヨジュク}①69ウ6、所犯^{シヨカン}①75ウ2、所望^{シヨバウ}①75ウ2、所行^{シヨキウ}①75ウ3、所期^{シヨキ}①75ウ4、所愆^{シヨケン}①75ウ4 (以上『塵芥』)

〈連接字での判断不可〉論所^{ロンシヨ}①9ウ7、配所^{ハイシヨ}①11オ2、番所^{ハンシヨ}①11オ2、本所^{ホンシヨ}①21オ3、住所^{ジュシヨ}①33ウ7、旅所^{リョシヨ}①38ウ6、兩所^{リョウシヨ}①39オ5、壇所^{タンシヨ}①68ウ7、當所^{タクシヨ}①72ウ6、他所^{タシヨ}①73オ6、料所^{リョウシヨ}①76オ6・①77ウ1、顯所^{ケンシヨ}①12オ2、行在所^{アンサイシヨ}①33ウ2、在所^{シヨ}①42ウ7、貴所^{キシヨ}①50オ7、節所^{セツシヨ}①95オ2、所帯^{シヨタイ}①68オ2、所司代^{シヨシタイ}①69オ5、所促^{シヨソク}①75ウ1、所課^{シヨカ}①75ウ2、所持^{シヨジ}①75ウ2、所得^{シヨトク}①75ウ2、所存^{シヨゾン}①75ウ3、所作^{シヨサク}①75ウ3、所能^{シヨノウ}①75ウ3、所爲^{シヨウイ}①75ウ3、所詮^{シヨケン}①75ウ4、所見^{シヨケン}①75ウ4、所縁^{シヨエン}①75ウ5、所勸^{シヨケン}①75ウ5、所愛^{シヨアイ}①75ウ5 (以上『塵芥』)

「ソ」形が現れるのは、国書抄物の『日本書紀抄』である。「成所作智」は仏教語で、「所」字に前接する「成」字は呉音読されており、「所」字の音形は呉音形が期待される。よって『日本書紀抄』の「ソ」形は、呉音形「シヨ」の直音形と考えられる。

呉音の直音形「ソ」を除けば、漢音読字に連接する場合を含め、混読資料では全て「シヨ」形である。特に、漢音資料の京都大学附属図書館清家文庫蔵『春秋経伝集解』訓点部分に出現する「會所^ソ6ウ3」は、混読資料の京都大学附属図書館清家文庫蔵『塵芥』で「會所^ソ104ウ8」と現れており、同じ語であっても異なっていることが注目される。

2. 宣賢書写本における「初」字の音形

(1) 漢音資料

宣賢の漢音資料では、漢音形の「ソ」形と呉音形の「シヨ」形との両形が出現する。

〔ソ〕 a 漢籍訓読資料…初^ソ筮^{セイ} 命制反 ②ウ5 (『礼記』)

〔シヨ〕 a 漢籍訓読資料…初九^{シヨ}①12ウ5 (『周易抄』) 初學^{シヨ} ⑤ウ5 (『中庸章句』)

「シヨ」形が出現する『周易抄』の「初九」は、室町時代に京都の学者と関東(足利学校)の学者とで異なる語形を使用したことが知られている。京都の禅僧桃源瑞仙(一四三〇—一四八九)は抄物の『百衲襖』で次のように記す(京都大学附属図書館蔵本1・62ヒ1貴に依る)。

足利^カ二八初九^{シヨ}トヨムソ・京ノ儒者ハ初九・初六^ソトヨムト云ソ

(第一冊17ウ12)

一方、足利学校一世快元の弟子、柏舟宗趙(一四一六一—一四九五)講の抄物『周易抄』(抄者は横川景三)には、次のような記述がある。¹⁵⁾

初六・三卦ノ時モ六ソ・(易の卦)カウアルソ・初六ト・ヨム
人モアレトモ・初^ソトヨムソ・我等ハ初^ソトヨムソ

(第一冊 8才14・15 傍線は引用者による)

京都の学者と足利学校の学者とでの音形の相違について足利衍述は「諸博士家の善を取り自己の見を加へ足利流を立てたるものなり」とし、足利学校独自の読み方を立てたものと考えた。¹⁶⁾ また川瀬一馬は、「何れも関東方言が学校の講義に現れている事実を示すものに外ならない。」と、方言の違いによる音形の相違と考えた。¹⁷⁾ しかし方言による音形の相違であれば、音韻としては両方言で対応するので、足利学校側の柏舟宗趙の記述に「ソ」と「シヨ」の区別があることが不自然である。本稿の筆者は方言による相違ではなく、京都の学者と足利学校の学者という学派の違いによる、呉音形容容の相違であると考えている。

宣賢は息子良雄(初名業賢、一四九九—一五六六)に書写させた『百衲襖』(京都大学附属図書館清家文庫蔵、1・62ヒ2貴)に自ら書き入れしており、『百衲襖』の当該部分を見たと思われる(ただし良雄書写本の当該部分は現存しない)。また柏舟宗趙の『周易抄』は宣賢自ら書写しているので、双方の言説を知っていたであろう。

宣賢は京都の学者である。しかし、宣賢が両言説を知りながら、「初九」に対して「足利」の読み方と一致する「シヨ」形を選択したのは、漢音形「ソ」を習得しておらず、「ソ」を一種の読み癖のように認識していたためと考えられる。

「シヨ」形の出現する『中庸章句』の例では、「初學」の「學」に清注記が付され、漢音形で読むべきことを示されている。そのような注記をした話の中の「初」字に対して「シヨ」形を選択したのも、漢音形「ソ」を習得していなかったためと考えるべきであろう。

このように、宣賢は「初」字の漢音形「ソ」を習得していなかった。これは宣賢書写の時点で、既に漢音形「ソ」が衰退していたことが原因であろう。混読資料である『塵芥』の単字掲出形も「シヨ」であり、これを裏づける。『礼記』に「ソ」形が出現するのは、移定の底本に「ソ」形が存在しており、底本の形を引き継いだためと考えられる。宣賢の『礼記』巻第十七には、「以唐本書写之以累代秘本加朱點墨點了」という宣賢の奥書に加え、寿永元（一一八二）年・建治二（一二七六）年の奥書をもつ本によって校合したことが示されている。このような文献であれば、底本の形を引き継いでいる可能性は十分に考えられる。

(2) 混読資料

全例「シヨ」で、宣賢が「ソ」形を習得していないという想定に反する例はない。

〔シヨ〕a 漢籍抄物…〈漢音に連接〉シヨキウ初九^⑨20オ15（『左伝聴塵』）初六初六^⑥

①22オ6、初九初九^⑨54ウ1（以上『春秋左伝抄』）〈呉音に連接〉初六初六^⑥

④15オ9（『左伝聴塵』）
〔C〕国書字音直読資料…〈呉音に連接〉ケシツクワシヨ元元^①元初^②ウ3（『宗源行事次第』）

〔E〕字書・辞書…〈単字〉初^①①1オ6（『塵芥』）〈呉音に連接〉シヨコ初猷^⑦75ウ6（『塵芥』）〈連接字での判断不可〉サイヨ最初^⑧

43オ4、初心初心^④75ウ5、初参初参^⑤75ウ6、初度初度^⑥75ウ6、初番初番^⑦75ウ6、初後初後^⑧75ウ6（以上『塵芥』）

3. 宣賢書写本における「廢」字の音形

(1) 漢音資料

宣賢の漢音資料では、「ヘイ」形と「ハイ」形の両形が現れる（仮名音注の「\」は、当該音注に合点があることを示す）。

〔イ〕a 漢籍訓読資料…ウキ廢^①2オ3、ウキ廢存亡^④5ウ5（以上『孟子』）
上『孟子』ウキ廢^⑤置^⑥8ウ5b、ウキ廢^⑦④4ウ6、ウキ廢疾^⑧35オ7、ウキ廢興^⑨43ウ3（以上『春秋経伝集解』訓点）
⑩11a、ウキ廢^⑩割注^⑪⑬27a、ウキ廢^⑫興^⑬①31、ウキ廢亂^⑭521b・⑥15a、ウキ廢徹^⑮269、ウキ廢^⑯荒^⑰⑱224、ウキ廢^⑲衰^⑳廢^㉑184b、ウキ廢^㉒壞^㉓194（以上『毛詩鄭箋』）
〔割注〕⑳14ウ7b・㉑5オ1a、ウキ廢^㉒割注^㉓⑳26ウ4b・㉑28ウ3a、ウキ廢^㉒疾^㉓①1ウ7・㉑16オ6a、ウキ廢^㉒疾^㉓②ウ1a、ウキ廢^㉒疾^㉓④31ウ4、ウキ廢^㉒衣^㉓

『日本書紀抄』では、訓注の被注語を原則漢音で読む。宣賢が「ハイ」と加点したのは、漢音形「ヘイ」が衰退していたためと考えられる。

宣賢書写本で「ヘイ」形を残す資料でも、「所」「初」字より揺れが大きいことは、「廢」字の特徴と言える。平安鎌倉時代に漢音形「ヘイ」が衰退し始めていたためであろう。

(2) 混読資料

宣賢の混読資料では、全て「ハイ」形である。

ハイ a) 漢籍抄物…〈連接字での判断不可〉
ハイ(合字) 廢シテノクヘシ ② 7オ

3 (左左廳塵) 爵・禄・予・置・生・奪・廢・誅ナリ 3ウ4b
(孝経秘抄)抄物)

b) 国書訓読資料…〈呉音に連接〉
ハイ 廢 務 3オ11、6ウ1、

停 廢 9オ10 (以上『年中行事』) 〈連接字での判断不可〉

廢 朝 8ウ1 (『年中行事』)

c) 字書・辞書…〈呉音に連接〉
ハイマウ 廢忘 13ウ6、
ハイム 廢務 14ウ6、

停 廢 36オ8、興 廢 25オ5 (以上『塵芥』) 〈連接字での判断

不可〉
ハイシヨ 廢処 11オ2、
ハイテウ 廢置 14ウ6、
ハイチ 廢置 14ウ6、
ハイカ 廢學 14ウ6、

ヒク 廢 77オ8、
ヒク 荒廢 109オ2 (以上『塵芥』)

宣賢の混読資料には漢音読が期待される箇所が存しないものの、漢音形加点がなく、宣賢の混読資料では呉音形「ハイ」が優勢であったと推測できる。

五、考察とまとめ

以上をまとめると、表1のようになる。

表1

宣賢	平安	鎌倉	所	初	廢
混読資料	混読資料	漢音資料			
「シヨ」のみ	「シヨ」優勢	「ソ」中心			
「シヨ」のみ	「シヨ」優勢	「ソ」のみ			
「ハイ」のみ	「ハイ」のみ	両形			

1. 宣賢書写本における漢音形・呉音形の分布

宣賢の漢音資料には漢音形と呉音形が並存し、混読資料には呉音形のみが出現する。しかし、漢音資料でも漢音形が現れるのは移点資料に集中する。

2. 宣賢書写本における漢音形・呉音形分布の形成理由

本稿で対象とした字について、平安鎌倉時代の漢音資料では漢音形が使用されたと考えられる。しかし平安鎌倉時代の混読資料では

呉音形が優勢であった。平安鎌倉時代の資料の状況から、混読資料における呉音形への一音固定化が、漢音形の衰退を引き起こしたと考えられる。

時代が降るにつれて混読資料における一音固定化は進行し、本稿で扱った字は呉音読に固定した。その結果、使用頻度の低くなった漢音形は衰退し、呉音形の使用は漢音資料にも広がった。宣賢書写本では移点の影響がある資料に限って漢音形が出現することから、宣賢は既に漢音形を習得していなかったと考えられる。

しかし移点の影響がある資料でも表記のみ漢音形を残したのではなく、発音上も漢音形を残す(『孝経秘抄』の「所・シヨト不讀」)。移点の底本の形を引き継ぎ、宣賢の時代としては特殊な語形を採用することにより、読みの「正当性」を担保しつつ、同時代他文献との読みの差異化を図る。これにより、テキストの威信を高める目的があったと考えられる。

本稿で扱った三字は漢音形が衰退し、呉音形が残存するという過程を経た。しかし漢音形の衰退が三字同時進行ではなかったことも、本稿の検討で分かった。「廢」字は平安鎌倉時代の漢音資料でも揺れがあり、漢音形衰退の兆しが見られた。一方「所」「初」字は平安鎌倉時代の漢音資料で漢音形を保ち、「廢」字より漢音形衰退が遅れたと考えられる。

〔注〕

- (1) 築島裕『平安時代語新論』(一九六九年、東京大學出版會)四〇六頁など。
- (2) 清原宣賢の『大学聴塵』(大東急記念文庫蔵本)に、「桓武天皇延暦十七年二月十四日 勅ヲ下シテ 五經ヲハ・漢音ニ・ヨムヘシト也。」(3オ1b)とある。
- (3) 湯沢質幸「室町時代における清濁と呉音・漢音」文明本節用集を中心として(『国語国文』第四六卷第二号 一九七七年二月、京都大学文学部国語学国文学研究室、石山裕慈「室町時代における漢字音の清濁——『論語』古写本を題材として——」(『弘前大学教育学部紀要』第一〇八号 二〇一二年一〇月、弘前大学教育学部)など。
- (4) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武威野書院)一一七頁。これによれば、平安鎌倉時代の変体漢文において、「二」字について漢呉両読ある字については、そのどちらか一方に統一して読「む」傾向があり、「各漢字に、一音固定化の現象があった」とした。またそれは、「漢音に固定するものの方が多かった」とらしい。
- (5) 柏谷嘉弘『日本漢語の系譜——その撰取と表現』(一九八七年、東苑社)八六六頁。
- (6) 所在も同複製本に依った。声点は佐々木勇「親鸞使用の声点加点形式について——坂東本『教行信証』声点の位置づけ——」(『訓点語と訓点資料』第二一九輯 二〇一二年九月、訓点語学会)に依り、「墨大声点」のみを認める。
- (7) 坂東本『教行信証』の後序部分は親鸞の文書で、当時の慣用に従って漢音読された。佐々木勇「親鸞筆『教行信証』の漢音——出現箇所と加点理由——」(『広島大学学校教育学部紀要 第二部』第一九卷 一九九七年、広島大学学校教育学部)六頁。
- (8) 当該例は、「所」字の上声点に合点が付されている。

- (9) 「連声濁」の用語は、鼻音が関与的な濁音化について指す。高山倫明『連濁と連声濁』(『訓点語と訓点資料』第八八輯 一九九二年三月、訓点語学会) 一一九頁、同『日本語音韻史の研究』(二〇〇二年、ひつじ書房) 一一〇頁の提案に従った。

- (10) 吳音声調は、東辻保和「安田八幡宮藏大般若波羅蜜多經の音注(資料)」(『訓点語と訓点資料』第四四輯 一九七一年六月、訓点語学会)、親鸞筆『佛說阿彌陀經』『佛說觀無量壽經』被字音注漢字索引』(『比治山女子短期大学紀要』第二七・二八号・二九号、一九九二年一〇月・一九九三年三月・一九九四年三月、比治山学園比治山女子短期大学)で認定した。

- (11) 当該例は「撥」を「廢」の字音で読んだものか。この例は別筆と考えられるものの、大きく時代の降る筆ではない。

- (12) 語構成が「御」+「會所」と解釈できるため、漢音に連接する例とした。

- (13) 原本では右傍に「同」とある。直前の「廢_レ処」の音と同じであることを示す。

- (14) 広島大学中央図書館蔵『遺跡講式』(大正二五〇六)室町期点では「成_レ所_レ作_レ智_レ123」とあり、音形・声調ともに吳音と判断できる。『日本書紀抄』における当該例は、別筆の可能性もある。

- (15) 天理大学附属天理図書館蔵本(122・1117) 清原宣賢写。原本調査に依る。

- (16) 足利行述『鎌倉室町時代之儒教』(一九三二年、日本古典全集刊行會) 六〇九頁。

- (17) 川瀬一馬『増補新訂 足利学校の研究』(一九七四年、講談社) 一七三頁。
(18) テキストは原本調査に依った。

〔付記〕資料調査にあたって、原本や画像の所蔵機関の関係各位には「高配を賜りました。また本稿を成すにあたり、査読委員の皆様には貴重なご意見を賜りました。記して、御礼申し上げます。しかし、いただいたご意見全てを反映できていない点は、私の力不足によるものです。本稿は、

JSSS 科研費(特別研究員奨励費、課題番号 26・5283)の成果の一部です。

—さかみず・たかし、広島大学大学院教育学研究科博士課程後期—